

訪問日：2017.9.26 / エリア：京都

光の音符



回答者 西村 ゆりさん(光の音符代表)

活動の経緯

盲学校で音楽の公開レッスンをする機会があり、彼らが想像もしたことのないような音楽の楽しみ方を知りました。視覚障害のある人たちと出会ったことで、本当に求めている人たちのために音楽をしないとイケないということを初めて理解しました。コンサートでは、プログラムは全て墨字で書かれているし、視覚障害のある人にとっては、手引きをしてもらい、席に座って、次に演奏される曲は何で、というふうに、鑑賞のために人に全部助けてもらわないとイケません。そこで、一般の人と同じようにコンサートを楽しめるように、点字のプログラムの用意をし、誰かが入り口に立って、声を出して点字プログラムのことを知らせながら、誘導案内ができる人にホールに立ってもらおうという活動を始めました。

最近の視覚障害者の状況としては、糖尿病などで中途失明される方も増えています。点字というのは習得にもすごい労力や時間が掛かります。文字の読み取りができる機器も手に入るようになり、点字を読む人が減ってきている傾向にあります。点字プログラムの作成と提供は、京都ライトハウス（視覚障害者総合福祉施設）と連携して、京都市交響楽団の演奏会に来られる方を把握し、確実に届けられるように人数分の枚数を準備しています。弱視の方のための拡大文字のプログラムも用意します。京都市交響楽団は、長年視覚障害のある方を支援してくださっています。

団体名は、音楽を聴いた時に本当に人の顔が明るくなり、音符と言うのは重なることで美しい音色になる、それは人間と同じだと思って、「光の音符」と名付けました。

アートの捉え方、 ハンセン病の人々との関わり

芸術や音楽というものは、単なる教養ではありません。一部の人が学び、楽しむものではなく、「公共の財産」であると考えています。社会の底辺にこそ浸透している必要があります。

95年からハンセン病の療養所邑久光明園に演奏に行くようになりました。90年にわたり隔離が行われたハンセン病の人たちは、外の人たちと言葉が違います。例えば、施設の外の人のことを彼らは壮健さんと呼びます。ずっと差別されてきた人たちは施設の中、コミュニティの中ではとても結束していて、私たちがコンサートに行ってもよそ者という感じがありました。

父親がハンセン病の治療をする医師だったこと、大学の教授を退官後はインドでハンセン病治療に当たっていたことで、音大を卒業したあとに、私もインドに行き、父を看取るため、2箇月滞在するという経験もしました。そのような経緯の中で、世界最大のスラム街と呼ばれるムンバイのダラビスラムを見ました。

そこではハンセン病の人々が、最底辺の暮らしをしています。お金もなく、稼ぐ手段もなく、多くが犯罪や物乞いをして生きている状態です。それでも彼らは家庭を営み、いきいきと社会生活を送っていました。

翻って、日本で訪問している療養所のことを思うと、ハンセン病の人々は国から保障を得て、豊かに生活をされています。しかし、断種手術や中絶が行われ、子を持つことはできません。死ぬ時も本名ではなく、仮名のまま亡くなっていく方がほとんどです。インドと日本を対比したときに、いったいどちらが幸せなのか分からなくなった、と療養所内でよく話をしていた方に言ってしまったことがあります。

その方は、インドの子どもたちに教育が必要だよ、学校を建てなきゃと私に言われました。教育の機会を奪われ、子どもにとって学校に行かせるということの本当の意味を理解されて発せられた

障害を持ちながらプロの演奏家を目指す若い才能を物心両面から支援し、同時に障害を持つ人に音楽を提供していくことを目的に1994年から活動を開始。主な活動は点字プログラムの作成と提供、優れた演奏家によるコンサートの企画、施設・病院での出張コンサートの実施ほか、インドのスラム街に暮らす子ども達への教育支援に広がっている。

〒606-0852
京都市左京区下鴨東梅ノ木町34-2
TEL/FAX: 075-722-6329

言葉だったと思います。

それをきっかけに、日本のハンセン病療養所の入所者の方々が、インドのスラム街の子どもたちの里親になるというプロジェクトを始めました。1万円があれば、1年間、子ども1人に教育と給食を提供できることが分かり、インドにFAXをして集まった子ども55人に支援を始めることからスタートしました。

光の教室の運営

スラムの子どもの教育施設として、「光の教室」は今年15年目となります。いい仕事に就かせるために、パソコンや英語を教えたいという人がいるけれど、それだけが教育ではありません。ここでは、食べること、愛すること、そして芸術的に表現すること、その3つを何より大切にしています。スラムではどれも十分にできません。子どもの時分から物乞いをさせられます。2013年に初めて、子どもたちが表現を見せるステージをしました。以降、毎年ステージで子どもたちを見てもらうということを続けています。

何とかインドの人々にこのような教育の重要性を広めるために、JICAの支援をもらいたいと思いましたが、私たちがやろうとしていることは、成果を数字で計れない、あまりにも抽象的な支援すぎるという理由から、申請は困難の連続でした。NGOのセクターの中では、生きることが最優先になるので、芸術などはその中の一部でしかないのです。私たちのように芸術が一番にやるというのは、なかなか理解してもらえません。何年も申請を続けて、ようやく草の根技術協力事業に採用してもらい、3年の資金提供を受けました。

現地の言葉やインドの音楽を教えるということを現地のプロが行っています。また日本人の学生がスタディ・ツアーを組んで、訪問するということをしています。日本の音楽家の方にもアドバイザーになってもらい、現地と一緒に訪問します。吉沢実さんと

いう日本のリコーダー第一人者に来ていただいた時には、子どもたちにリコーダーを吹かせるだけでなく、筒状のものを空気が通って音が出る、そういうことを楽しむ経験をしてもらいました。スラムは、頻繁に車が通りいつでもうるさく、耳を澄ます体験などしたことのない子もいるので、子どもたちはとても楽しんでいましたように思います。

彼らは毎年やってくる私たちの国を見たいと言って、住んでいるコミュニティの外に関心を持ち始め、日本に來たいと言ってくれました。2020年には、彼らを招いて、邑久光明園で支援を続けてくださっている方々に会わせたいと思っています。今は現地のメディアにも、活動をいい形で紹介してもらえ、現地の支援者ができつつあります。インドの人たちが、自分たちの国の子どもとして彼らのことを支援できるように、最後は現地の人々に手渡していこうと思っています。

行政への提案

大きな組織はどうしても大きく物事を変えようとするので、上から目線になったり、それが言葉に出ていたりします。そういうことに、現地の人たちはとても敏感で、心を開かなくなるということもあります。

芸術は直接に役に立たないからいいのであって、文化や芸術でお金が儲かるとか何か効果が生まれるということは、付随的なことです。結果は見えにくいし、短期的には何も変わりません。継続させることが重要だと思います。だから私たちが小さいことですが、活動の通信を出し、発信を続けています。全ての人が芸術を本当に楽しめるためのプロデュースの力が必要だと思います。